

平成29年度自己評価表

鳥取県立鳥取雙学校

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)</p>
---------------------------	------------------------------------------------------------------------------	----------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初		評 価 結 果 (10)月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	経過・達成状況	改善方策	
確かな学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(教務) ○個別の年間指導計画を指導と評価・改善に生かす。	○教科等の個別の年間指導計画を作成し、単元(小中高)や活動(幼)のねらいに対して、指導の反省欄を設けて指導の充実を図っている。教科ごとに「つまずきの記録」を取ることも定着し子ども達の指導に活かす資料として機能しつつあるが、内容にばらつきや偏りがあること、教員間の情報の共有が十分ではない等の課題がある。	○全教員が、個別の年間指導計画を指導、評価、改善に活用して、授業を充実させている。	○研修会等を開催し、個別の年間指導計画の運用やつまずきの記録の意義について、共通理解をはかる。 ○「つまずきの記録」などの、個別の年間指導計画のよりよい記載方法について、教務部内で検討する。 ○「つまずきの記録」について、定期的に入力状況を確認し記載を呼びかける。 ○授業の反省や子ども達のつまずきなどの情報は、学部研究会・教科会などで共有化する。	○学部会・教科会などを通して、生徒の共通理解が進みつつある。 ○「つまずきの記録」の記載方法にばらつきが見られる。 ○半年間指導した中で、4月当初設定した目標・評価項目等と幼児児童生徒の実態の間にギャップが生じている教科等が見られる。	C ○定期的に入力状況を確認し、目標・評価項目等と幼児児童生徒の実態との間のギャップがある場合については、担当者に連絡し、計画の変更も視野に入れた上で相談に応じる。 ○「つまずきの記録」の記載方法について教務部員が点検の上、修正があれば職員に修正事項を連絡する形で、共通理解を図る。
	(研究) ○聴覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○聴覚障がいのある幼児児童生徒それぞれの個に応じた指導を行うことが求められており、聴覚障がいに関する職員研修、一人1授業や参観ウィークを行い、授業力の向上に努めている。	○ニーズに合った研修を企画する。  ○参観ウィークや研究授業の機会に全教員が他学部の授業を参観する。	○聴覚障がい教育に関する職員研修を計画、実施する。計画の際は、教職員のニーズを抽出するとともに校内研究と絡めた内容を優先する。 ○他学部への参観ができるよう、各学部で参観計画を立てる。また授業評価シートを見直し、参観の各視点で学部間の系統性がわかるようにする。	○夏季休業中に2名の外部講師を招き、それぞれ聴覚障がい教育の専門性の向上や校内研究のテーマに即した内容の研修会を実施した。 ○各学部間の系統性が高まるよう授業評価シートの見直しを行い、参観ウィークや一人1授業で活用している。	C ○外部講師を招いた授業研究会を実施し、指導助言を受けたり講演を聞いたりして、更なる専門性の向上を図る。 ○一人1授業の実施を各学部の担当者が中心となり進める。
	(研究) ○幼児児童生徒一人一人の実態やニーズを総合的・多面的にとらえ、一貫性と一丸性のある指導と支援をA P D C Aサイクルで行う。	○幼児児童生徒の数は少ないが聴覚活用や認知特性などの実態は多様であり、そこに起因するコミュニケーションや言語獲得・拡充の困難さがあり、また基礎学力の定着にも課題を生じている。	○各学部ごとにチームアプローチによる幼児児童生徒の実態把握を行い、A P D C Aサイクルによる授業改善を繰り返し、授業力を向上させる。	○各種発達検査や日常観察を通して実態把握をする。 ○実態把握から個に応じた具体的な指導や支援を工夫する。 ○学部研究会を通して幼児児童生徒の実態や指導法について共通理解をし、授業改善を図る。	(幼) 活動内容や指導方法について、機会をとらえ学部内で共通理解をするようにしている。 (小) 個々の児童の実態やつまずきなどの情報を学部内で共有し、指導形態の工夫することで個に応じた授業に取り組んでいる。 (中) 各種検査や日常観察を通して生徒の実態把握を踏まえて指導方法を工夫しながら指導に取り組んでいる。教科の枠を超えてケース会議を持ち、生徒の変容の記録を積み重ねている。 (高) 個々の生徒の進路指導シートを作成しキャリア発達の視点からグループごとに話し合い共通理解を図っているが、学部全体まで広がってはいない。	C (幼) 学部として一貫性のあることばのかけ方や支援の方法などを共通理解し、指導法の工夫や改善を図る。 (小) 発達検査を実施する。参観ウィークや一人1授業、授業研究会を通して指導法の工夫や改善を図る。 (中) 一人1授業を進め、互いに授業を見合うことで専門性を高めていく。 (高) 各グループの内容を学部全体が共有し共通理解できるような機会を設定する。
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成)	(教務) ○個別的教育支援計画の運用に、キャリア発達段階表を連動させ、幼児児童生徒の支援を充実させる。	○キャリア発達段階表に連動した個別的教育支援計画の運用が軌道にのったが、キャリア発達段階表の活用状況は必ずしも十分とはいえない。(キャリア発達段階表を見るのは、ケース会議や懇談時に限定されがち)	○すべての教職員が個別的教育支援計画の運用に、キャリア発達段階表を効果的に活用し幼児児童生徒の指導に活かしている。	○個別的教育支援計画の運用等において問題点があれば、各学部の意見等を吸い上げ、個別的教育支援計画及び運用等をよりよいものに改善していく。 ○キャリア発達段階表の扱い方・活用等について教職員の共通理解をはかる。(教職員からキャリア発達段階ひよに関する質問等を募り、回答していく形で共通理解をはかっていく)	○キャリア発達段階表の存在及びその目的は理解されているものの、活用方法までは十分には理解されていない。	C ○キャリア発達段階表の活用について、アンケートを通して職員の意識等を調べ今後の参考資料とする。 ○キャリア発達段階表の活用に関して、疑問点を募りそれらに答えていくことを通して、校内の意識を高めていくと共に、全職員の共通理解を図る。
	(総務・情報部) ○学校公開を通して、本校教育の理解と啓発を図る。 ○タブレット端末、電子黒板等の情報機器を用いたICT教育を推進する。  ○携帯電話やインターネットについて、生徒が正しい知識を身に付けて活用できるように支援する。	○学校公開では来校者も増え、アンケート回収率も高まってきている。 ○ICT機器を用いた授業が多く行われているが、さらに使用できる機器を広げたり、使い方を深めたりする余地があると思われる。 ○外部講師による研修を受けて、インターネットやSNSなど情報モラルに関する危険性についての知識を得ているが、中高生は実際の行動に結び付けられないことがある。	○学校公開の案内などにより、来校者を増やし、本校教育への関心・理解を深める。 ○個々の教職員が、それぞれの授業の中でICT機器を効果的に活用する場面を増やす。  ○生徒が、インターネットやSNSの危険性について意識し、安心・安全な生活ができる力を育む。	○学校公開の案内文書や野外掲示により周知を徹底したり、「とりりうだより」の内容を工夫したりする。 ○教職員対象のICT機器活用のための研修会を開く。合わせて情報機器の維持・管理に努め、機器を使用しやすいように整備する。 ○外部講師による、具体例を交えた研修会を開く。 ○児童生徒にアンケートを行い、安心で安全な情報機器利用ができていくか確認し、意識づけるようにする。	○野外掲示板や学校公開の案内、受付資料の工夫などを通して、本校教育への関心・理解は徐々に浸透してきている。更に理解を深めるための工夫も必要である。 ○情報機器の維持・管理に努めた。ICT支援員の方の協力を得て、また教職員の要望を受け、様々な情報研修が実施できた。それにより、職員へのICTへの意識や授業も向上し、授業で還元できたことと思われる。しかし、効果的な活用状況にはまだ課題があるようだ。 ○事前に生徒にアンケートを実施し、SNSやインターネットの正しい知識を学習できたことは良かった。事後の聞き取りでも、内容をよく理解でき、大事な学習だった旨の感想を得た。 ○会議室前の掲示は、4・5・7・9月に実施できた。 ○案内状の発送やメール送信先に多少間違いがあった。年度初めに、昨年度の引き継ぎ事項を見直した。	B ○本校教育への関心・理解を更に広げるために、学校公開や野外掲示板などの内容に工夫を加えていく。 ○アンケート内容を検討して、来年度の職員情報研修会や生徒情報モラル研修会の実施に生かしていく。 ○ICT支援員の支援が効果的なので、今後も続ける。
	(生活安全部) ○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を、心身の健康、交通安全や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的に幼児児童生徒の実態に応じた指導を行う。	○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱として、心身の健康、交通安全や災害からの安全確保、健康的な食生活について様々な行動を計画し、生活安全部の職員、学級担任を中心に指導を行っている。	○心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的かつ継続的に指導に取り組み、幼児児童生徒の実践力の向上を図る。	○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画の中から本年度の重点取組項目を8項目決定し、事前の打ち合わせと事後のアンケートや部会による振り返りを通して、課題を明確にし、その後の取組に活かせるようにする。	○各年間計画に従って学習、行事に取り組んだ。昨年度の反省を生かしながら、改善を加え、実施した。事後にはアンケートを集約し、次年度への課題を明確にして、来年度へ引き継ぐようにしている。 ○不審者対応訓練の結果をもとに、校内の安全設備の見直しをし、施設のできる部屋の配置や子どもたちを守る体制について検討している。	B ○アンケート集約を元に、交通安全教室や災害に対する避難訓練をよりよくし、また全校遠足や職員研修が充実したものになるよう部会内で具体的に話し合い、来年度の改善へつなげていく。 ○ヘルメットの整備や施設のできる部屋を増やすよう取り組みを進めていく。
(進路)	○キャリア教育や進路に関する情報を発信する。 ○実態や発達段階に合わせて、社会人として必要な力をつけていけるようにする。	○進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育取組状況の共通理解を図る。 ○進路担当が発信する情報により幼児・児童・生徒の指導や支援を確認・工夫・改善している教職員数6割をめざす。 ○卒業生のフォローアップ状況や聴覚障がい者を支援している関係機関の講演の内容を指導や支援に活かしている教職員数6割をめざす。	○毎月、進路だよりを発信する。 ○掲示板等で「求人状況」や「進路に関する最新情報」を発信する。  ○卒業生のフォローアップ状況を学期に一度、報告する。 ○「聴覚障がい者の現状と課題」をテーマにした職員研修を実施する。	○毎月、進路だよりを作成し、保護者に配布、職員にも掲示板を通して周知することができた。これにより他学部のキャリア教育の取り組みがわかるようになった。 ○掲示板でセミナーの案内等、進路に関する情報を発信することができた。進路部以外の職員がセミナーや会議に参加することができた。 ○卒業生のフォローアップ状況についての報告は十分にできなかった。高等部だけにどまっていたこともあった。 ○障害者就業・生活支援センターの相談員を講師に迎え、「聴覚障がい者の現状と課題」をテーマに職員研修を実施した。	C ○たよりを一方的に配布するだけでなく、感想や意見がもらえるような取り組みをしていく。 ○継続して進路関係の情報を発信していく。 ○卒業生のフォローアップ状況の報告の仕方を提案していく。 ○職員が子ども達の支援や指導に活かせるような職員研修を考える。	
心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)	(自立活動部) ○自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うことができるよう、環境や教材教具、年計の整備に努めるとともに、専門性を高めるための職員研修を行う。	○発音、手話、聴能に関する職員研修を行っている。 ○補聴器の整備のため、聴能関係の道具の管理や点検、補聴器店による定期点検の日程調整を行っている。 ○自立活動の指導に関わる教材教具の整理や、教科と自立活動の関連が記録しやすい年計の作成に取り組み始めた段階である。	○職員が、自立活動に関わる専門性を高め、学校全体で教材、教具を共有、活用して自立活動の指導を行う。	○補聴器店の整備のため、聴能関係の道具の管理や点検、補聴器店による定期点検の日程調整を行う。 ○自立活動の専門性を高めるための全体研修会を年3回行う。 ○学部を超えて共有できる教材教具の整理のために教材フォルダの整理と教材教具の把握、管理場所の決定を行う。 ○教科と自立活動の関連が記録しやすい年計の作成、試作を行い、来年度の実施につなげる。	○補聴器店との連携を密に行い、補聴器の整備や子ども達の補聴器の管理等をスムーズに行うことができた。また、保護者や職員の要望に応じて補聴器店の職員を招いて研修会を行った。 ○発音、手話、聴能に関する職員研修を行い、専門性を高めることができた。 ○データ教材については、教材フォルダの整理を行い始めている。教材教具の把握もほぼできている。 ○教科と自立活動の関連が記録しやすい年間指導計画の試作中である。	B ○研修を実践につなげるために発音勉強会を企画していく。 ○教材は、管理場所の決定と整理に向けて準備をしていく。 ○年間指導計画については今後自立活動部内での検討を重ね、来年度実施に向けて提案していく。
	(生活安全部) ○クラブ活動や部活動を通して、児童・生徒の自己表現力や自主性を高めることができるように指導・支援する。	○活動に対する興味・関心は高いが、教員の指導に頼りがちであり、十分に自主性を発揮しているとは言い難い。各都部会を開き、活動内容に見直しを持つよう支援を行っている。	○活動を通して児童・生徒の自己表現力や自主性が高まるように指導・支援する。	○児童・生徒との話し合いを通じてクラブ・部活動として、また個人としての目標・課題を明確にすることで意欲的に活動に取り組めるようにする。	○中盤体に向けて各自が目標を設定し、日々努力した。目標が達成できなかった生徒もいたが、目標に向かって自分の苦手な練習に取り組んだり、気持ちを強く持ったりして頑張る姿が見られた。	C ○来年度の中ろう体に向けてそれぞれがより高い目標を立て、意欲的に活動に取り組めるようにする。 ○雙学校写真展や遠藤記念日に向けて意欲的に活動し、より良い成果を発表できるよう取り組む。
	(生活安全部) ○児童会・生徒会において、児童・生徒が計画に基づいて見通しを持って活動していけるように指導・支援する。	○児童会・生徒会役員になった児童・生徒は、その責任を果たそうとしている。話し合いにおける活発な意見交換や見通しを持って活動を進めていること、また個々の意見を取り入れてより良いものにまとめ上げていくことについてはまだ教職員の支援が必要である。	○児童・生徒が自ら計画を立て、児童会・生徒会の運営を行う。学校生活の充実と向上のために問題を協力して解決できるように指導・支援する。	○児童会・生徒会の年間計画を作成し、役員児童・生徒を中心に話し合いや活動の準備等に関する助言や指導・支援を行う。	○年間計画に基づいて取り組んでいる。児童会は教員の助けを借りながら、2人の上級生が下級生を引っ張って活動する様子が見られる。生徒会においては生徒同士の活発な意見のやり取りが見られ、前向きな話し合いができていく。仕事分担も生徒同士で相談し合い、特定の生徒に偏ることのないよう取り組んでいる。	B ○今後も引き続き、児童・生徒中心に話し合いができるように助言や支援を行う。生徒会については来年度の生徒数の減少もあるため、生徒会活動の内容や、部活動の精選についても検討する必要がある。

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%) C:変化の兆し(60%) D:まだ不十分(40%) E:目標・方策の見直し(30%以下)